連載

太田哲也の フェラーリ ニッポン ストラダーレ

［TEZZO F 360 ストラダーレ 製作プロジェクト］

第13回 マフラー装着完了。第一印象は?

2回に渡って報告してきたマフラー製作の話題だが、ご覧のようにようやく装着となった。天候の問題もあり試走こそお預けとなったが、ついにそのサウンドを確認することができた。今回はその第一印象などを報告。

隠岐麻里奈●文 text by Marina Oki　花村英典●写真 photographs by Hidenori Hanamura
クライスジーク／テッツォ●協力 cooperation by Kreissieg☎045-476-1000/TEZZO☎03-5465-2553
●テッツォ・ウエブ専用サイト　HP=http://www.tezzo.jp/

著者プロフィール 隠岐麻里奈
サッカーなどを中心にしたスポーツドキュメントを得意とするスポーツライター。
ほかに、一般誌で著名インタビューなどの連載ももつ。

太田と井上の再会から始まったTEZZOマフラー製作。ついに、完成したとの連絡が入り、太田はさっそくクライスジークに出かけた。

太田は愛車からのぞくマフラーを見るなり井上に話した。

「いいですね、上品な感じだし、他にはない形。どこを変えたんですか?」。

実は、遡ること10日前にも連絡を受けていた。ところが、いざクルマにつけてみたところ、井上には納得がいかない部分があった。テーパー部が長くて緩やかだったことによる目の錯覚で、出口から出てくる2本が斜め方向に見えてしまっていたのだ。さらに、出口形状をあえてハス切りに選択しなかったので、飛び出た部分が長く見える。そのため、再度出口部分を造り直し、完成させたのだった。

「出口付近でパッと開くように角度を急にして、長さも2cm短くしました」。

太田は、それを聞いて納得したようにうなずいた。

「俺の意見が負けたね」。

実は、緩やかなテーパーにしたいと提案したのは太田だった。単体ではよかったが、装着すると違って見える。こうして、技術者とのぶつかりあいの末にできあがったマフラー。井上も「TEZZOマークと相性がいい。似合ってますね」と満足そうだ。ふたりは感慨深げにフェラーリ360モデナを後ろから見つめていた。

果たしてどんな音を奏でてくれるのだろうか?　太田が、キーを受け取り、クルマに乗り込んでアクセルペダルを踏んだ。

ゴゴゴゴゴゴ、と太い音が響いてくる。しばらくして抜けるような、でも透明感のある轟音が鳴り響いた。井上は、じっと耳をすませていた。

「いい音が出ていますね。これでサーキットで走ったら、もっとよく響きますよ」。

バルブを60ccとビッグバルブにし、集合場所も太くしたことで、全体に抜けがよくなったという。X管前後のパイプのなかで音が響き、排気パワーが出口に向かっていく。出口からのぞいたマフラーは終始、小刻みに振動していた。よく音が響いているのが、そうした見た目にもわかった。

太田がさらにアクセルを踏み込むと、マフラーの出口から線香花火のように火花が散った。私が驚いていると、井上が説明してくれた。

「フェラーリの場合、１０００℃ぐらいに熱が上がるからね」。

それだけの耐熱性をもたせるには、やはり技術と経験が必要であり、それを活かすための研究も不可欠だ。

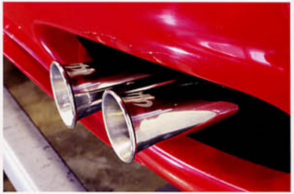
「そう、だから60ccにすればパワーが上がるとは理屈でわかっていても、なかなかそれを実行する人はいないんですよ」。

井上が造るマフラーは、本来フェラーリが採用している可変装置を活用している。その開閉装置にあたるバルブの大きさを純正の48ccから60ccに変えられるようになるまでは、何度も何度も造り方に研究を重ねた。

「振動を受ける面積が大きくなるわけだから、閉じたときにものすごい排気がバタフライ部分に当たる。その振動や超音波の勢いでシャフトが減ったり焼け付いてガタが出やすくなる」。

そう言って、井上はすでに真っ黒に焼けてしまったマフラーを見せてくれた。そして、「１０００℃っていったら、こうやって近づいたら煙草の火がついちゃうぐらいだからね」とニヤッと笑った。

これまで2回に渡って、太田と井上を通してマフラー製作に密着してきた。物造りは、結局のところ造り手の思いに行き着くのだとつくづく私は感じていた。井上の研究熱心さには目を見張るものがあったし、太田との意見交換は物造りのおもしろさを教えてくれた。物造りを「趣味みたいなもの」だと言い切ってしまう様子には、なんだかおもちゃを与えられた子供のような楽しさが伝わってきた。



ついに装着完了となった。TEZZOとクライスジークのコラボレーションによるフェラーリ360モデナ用オリジナルマフラー。ご覧のようにサイレンサーとテールパイプの各部にフェニックスをイメージしているTEZZOのロゴが入り、存在感を示している。写真ではわかりにくいかもしれないが、シガライターソケットのボックス内にサウンド切り替えスイッチを設置。街中などを静かに走る時と、ホンキでサーキットなどを走る時と使い分けることができる。早速この日、太田はそのサウンドをチェック。後者のホンキモードの際にはまさにレーシングカーのような迫力あるサウンドを体感し、どれだけのパワーを得ているかどうかファーストインプレッションへ期待が膨らんだ。なおこのTEZZOマフラーは価格73万2900円にて、現在販売中だ。問い合わせは右記番号へ。

「そうは言っても、お客さんが待ってて、その要望どおりにいかないこともあるから楽しいことばかりじゃないけど。まぁでも、造るのが難しいから面白いってとこはあります。楽器は自分で調節できるけど、マフラーは何十回も造ってこそ、奥の深さがわかる。うまくいくと楽しいしね。今回、TEZZOは、とくに成功したかな」。

こうしてできあがった、太田と井上の融合から生まれたこだわりの1品。フェラーリに乗る人たちは、この『素材』をどう楽しむのだろうか。

「音を楽しむためにクルマに乗っている人もいるといっても過言ではないでしょうね」（井上）。

なぜ、音にこだわるのだろうか。そこに何があるのか私は考えていた。

「それはね、やっぱり石の上で『うぉーっ』て吠えるような、雄のもっている部分じゃないですか。女の人はやかましいなぁって顔で見てますけど、おっさんたちは、『おっ、いいな』って見てますからね」。

フェラーリに乗って、いい音を出して走るとはそういう意味もあるのか。男の闘争本能を刺激されるような、狩りに出て家族のために餌を採ってくるような雄として生きるために埋め込まれたDNAに近いのかもしれない。

「カーンって鳴ったときのあの音は、グッときますからね。たかが音、されど音なんです」。

井上を尋ねてくる客には、大病院の院長や大財閥の人間もいるという。彼らのなかには、こっそりとマフラーを代えにくる者もいる。それは、やはり秘密の『ストレス解消』が欲しいからかもしれない。想像してみてほしい。学生時代、いわゆる不良だった井上と、優等生だったであろう医師。普段は接点のない両者だが、「マフラー」という遊びでつながっている。授業中は目を合わせることもないふたりが、放課後、こっそりと落ちあってクルマを山に飛ばしにいくようなものだ。

そして、「もう少し音を高くするにはどうしたらいいか?」などと井上に質問し、納得いくまで改良を重ねることもあるのだという。

「医師もある意味、職人だから、自分の試みを試したいという欲があるんでしょうね」。

また、そうした客の要望に応えてきたから、マフラー業界のなかで井上は生き残ってきた。

「社会悪と言われてきたマフラー業界は、もう終わりかけてきている。生き残っているマフラー屋の特徴は、客の遊び心につきあっているところ。そのうちに、おとなの贅沢品や遊びの文化ができあがってきた」。

つまり、時代の流れとともに、おとなの男たちの『遊び道具』へと変わってきたということなのだ。

「そうそう、昔はマフラーなんて暴走族の遊びだった。5、6万だったしね。それが、いまじゃ70万～80万もする贅沢品になったんですよね」（井上）。

女性であれば、高級な腕時計を自分を磨くためのご褒美として買うようなものだろうか。

「それで手に入れたら、ダイヤを一粒入れてみたり、イニシャル入れたり、プラスアルファなことをしたくなりますよね。マフラーも同じなんです」。

マフラーは、ユーザーにとって自分を楽しませるためのモノなのだ。それは、太田が以前に語っていたTEZZOというブランドのめざす方向にも通じるものがある。

「つるしのフェラーリに有り難がって乗っているんじゃつまらない。自分なりに手を入れて、自分なりの『完成品』を造ってみたいと思っている。そして、それこそがTEZZOでやりたいことなんだ」。

（文中敬称略）